

Chap. 6

The Genealogy of Morals

June 20, 2008
Mineki Oguchi

0. 導入

- 異なる社会は異なる歴史的条件のもとで異なる道徳を構築する（Prinzの構成的感情主義＋道徳的相対主義）。
- 道徳の系譜学は、現在の価値が卑しい起源を有しているということを暴露することでそれを揺るがす。
⇒ だが、道徳の系譜学はしばしば「発生的誤謬」を犯していると批判されてきた。「価値の起源」への問いは「価値の正しさ」への問いとは無関係ではないか？
- 本章が明らかにすること
 - ① 系譜学的方法は価値の起源を追求するための有効な手段として使える。
 - ② 系譜学は現在の道徳的価値に対して懐疑的な態度をとることに正当な理由を与えうる。

1. ニーチェの系譜学

- 初期キリスト教は、自らが被った迫害と貧困に対し、圧政者であるローマ帝国の価値感を逆転することでそれを克服した。キリスト教的価値観の背後には「ルサンチマン」という卑しい起源が存在する。ニーチェは代わりに、人間の自然本性に基づいた「貴族道徳」を称揚する。
- ニーチェの系譜学は多くの重大な誤りを含んでいるが、そこには汲むべき洞察もある。
 - (1) 現在受容されている価値はそれ固有の歴史を有している。
 - (2) その歴史は好ましいものではないかもしれない。
 - (3) 価値がもつ歴史に対して盲目であることは、その価値に対して不当な信頼を置くことにつながる。
 - (4) われわれは既存の価値をより望ましいものへと置き換えることができる。

2.1 ニーチェとキリスト教

- ニーチェ批判
 - ・ キリスト教的と言われる価値観（禁欲、純潔、慈善）はそれ以前にも見られる。
⇒ルサンチマンがそれらを生み出したのではない。
 - ・ 初期キリスト教徒は貧困層ではなく中産層や富裕層が担っていた。
⇒貧困や圧政は無関係。
 - ・ 草創期に起こった伝染病の流行がむしろキリスト教拡大の原因。
⇒天国での幸福という説話が人々を慰め、弱者への扶助が信者の生存率を高めた。
 - ・ キリスト教は女性に対してより確かな地位と安全を約束したということも要因（離婚・不貞・中絶の禁止）。
⇒初期には女性が布教において主要な役割を果たしていた。

2.2 文化的伝達

- 道徳的価値の文化的伝達における一般原理は何か？
⇒ Prinzの見解：文化的伝達は「適応度(fitness)」の関数である。
- 主要な三つの要因
⇒ある評価的信念の伝達確率が高まるのは次のときである。
 - (1) 物質的要因：その信念が保持者あるいは教授者に物質的利益をもたらすとき
 - (2) 物語的要因：その信念が学習を促進する物語的な文脈（歴史・科学理論・訓話・神話）に置かれているとき
⇒一貫性のある物語は記憶を助ける、他の信念群との統合によって放棄を難しくする、自己同一性の形成に深く関わってくる、など。
 - (3) 感情的要因：その信念が感情に訴えかけるものを持っているとき
⇒感情も記憶を助ける、肯定的感情は報酬系、否定的感情は懲罰系として働く、など。

2.2 文化的伝達

- Prinzの「自然化された系譜学」は進化論的モデルか？

◇“Gene”と“Meme”の違い

- ①信念は突然変異のようなものによって変化してゆく必要はない。
- ②信念は機械的な「複製」によって伝達されるわけではない。
- ③文化的伝達は水平的なプロセスを含む。
- ④文化的伝達には遺伝子型と表現型の区別が完全には適用できない。

⇒ 生物学的進化と文化的伝達の間には緩い類似性があるだけ。Prinzは“Meme”概念を採用しない。だが、文化的伝達において適応度概念が果たす役割は認めるべき。適応度という視点を持ちこむことで、なぜ特定の価値だけが長らく保持され、他の価値は消失するのかを理解することができる。

2.3 カニバリズム

- カニバリズムの事例に「自然化された系譜学」を適用する。
 - ・ カニバリズムは国家成立以前には広範に見られたが、国家成立とともに次第に見られなくなる。
 - ・ 埋葬時のカニバリズムは、死者の生命を象徴的に延長し、喪失のトラウマを克服するため、あるいは、遺体を衛生的に処理するためになされると説明できる。

⇒では、戦争時のカニバリズムはどうか？

- Marvin Harrisによるコスト・ベネフィット的説明
 - ・ 資源をめぐる部族同士の戦争において、戦争相手の死体や捕虜をどう扱うか。
 - ◇死体：捨て置いて腐らせるより、食して英気を養うべし！
 - ◇捕虜：農業がないなら奴隷にしても利益がない。戦場で食すか、連れ帰って拷問した上で部族の皆と食すべし！

2.3 カニバリズム

- ・ 税金を徴収する仕組みを備えた国家では、隣接集団と戦争をして捕虜を食するよりも、生かして税金を徴収する方が利益が上がる。
⇒カニバリズムはタブーに。
- ・ 諸制度が整備されたアステカ王国でもカニバリズムは継続して行われていた。これは反例になるのでは？
⇒Harner：アステカには発達した農業がなく、旱魃や飢餓も深刻だった。したがって、人肉は貴重なタンパク源だった。
⇒Critics：しかし、アステカには十分な栄養源があり、しかもカニバリズムを行っていたのは富裕層だった。
⇒Harris：カニバリズムは必要不可欠なものではないかもしれないが、それを行う利益はコストを上回っていた。

2.3 カニバリズム

⇒ Critics：では、なぜ儀式が必要なのか？

⇒ Harris：軍隊を派遣することによってではなく恐怖を蔓延させることによって王家への忠誠を確立するため。

⇒さらに、儀式には宗教的・神話的な意義が付与されており、従事者はそうした意義のもとで食人を行った。

- ・初期のアステカ族は栄養的な理由からカニバリズムを行った。戦争は心理的な負荷が高いため、戦士たちは戦勝を祝う儀式を催し、その場で人肉を食した。

⇒いったん儀式化されると、感情的要因が大きいため物質的要因がなくなった後も継続して行われる。

- 以上のように、カニバリズムの盛衰は物質的・物語的・感情的要因による適応の増減という観点から説明できる。

2.4 結婚とキリスト教会

- 現代の西洋社会の価値観
 - 一夫一婦制、恋愛結婚
 - × 一夫多妻・一妻多夫制、いところ婚、許嫁婚
- ・ 複婚制、いところ婚、許嫁婚のいずれも広範な社会において認められているし、その利点も容易に説明がつく。
- ・ では、単婚制の利点は何か？
⇒ひとつには、集団内の競争とそれに伴う軋轢を軽減させること。

2.4 結婚とキリスト教会

- キリスト教圏の社会に関しては他の説明も可能（Jack Goody）。
 - ・ キリスト教会によって禁止・非難された制度・行為：
◇ 複婚制、近親婚、許嫁婚、聖職者の結婚、離婚、未亡人による相続、楽しみのためのセックス、養子縁組
 - ・ これらの禁止や非難はすべて、家族の規模を縮小し、相続人のいない家庭を増やすという結果をもたらす。そして、これは教会にとって大きな利益を生む。
⇒ 相続人がいない場合、遺産は教会によって相続される。
 - ・ 肉食者が利益を得るカニバリズムとは異なり、結婚制度の場合に利益を得るのは教会組織。
⇒ では、なぜ信者は教会に従うのか？

2.4 結婚とキリスト教会

⇒では、なぜ信者は教会に従うのか？

- ・ 聖書や影響ある教父たちの思想を介して、純潔が尊重され、不純が嫌悪されるという態度が広められていった。それによって、複婚や近親婚は否定的な感情とともに拒否されるようになった。
- 以上のように、キリスト教圏における結婚に対する態度の変化も、物質的・物語的・感情的要因の結合によって説明できる。

3 批判としての系譜学

- 自然化された系譜学の哲学的含意は何か？ それは道德の地位に関して何を明らかにするのか？
- ・ ニーチェは系譜学的分析を道德批判のために使用しうると考えた。ニーチェが考えたように、系譜学的分析は現在の道德に対する懐疑的な帰結を保証しうるか？

⇒いくつかのテーゼを順に考察しよう。

※以下で「道德的価値」とは、「 ϕ することは道德的に良い（悪い）」という形式の評価的態度を意味する。

※同様に、「歴史的事実の結果」とは、それが道德的直観によって、あるいは何らかの規範的原理からの合理的演繹によってもたらされたのではない、ということを含意する。

3 批判としての系譜学

- (G1) もしある道徳的価値に対する信念が歴史的出来事の結果として生じたならば、その道徳的価値は誤りである。
 - ・ (G1) は発生的誤謬に陥っている。信念をどうやって形成したかは、その信念が正しいか否かとは無関係である。自分の誕生日に賭けて宝くじに当選した場合を考えよ。
 - ⇒ Critic：道徳的真理はわれわれの道徳的信念に依存しているので、宝くじの場合よりも真理と信念の間の溝は狭いのではないか。
 - ⇒ Prinz：この特徴は(G1) を救済しはしない。真理がわれわれの信念に依存しているなら、われわれがどうやってある道徳的価値を真とみなすに至ったかについての歴史的な事実は、その価値を真にする。

3 批判としての系譜学

- (G2) もしある道徳的価値に対する信念が歴史的出来事の結果として生じたならば、その道徳的価値は保証されていない。
 - ・ 信念がどうやって獲得されたかはその信念が正当化されるか否かと関わりがある。（cf. 薬と患部の形態的類似性に頼っていた中世の医者）
- ⇒ Prinz：道徳的判断は自己正当化的である。私が適切な反応傾性（＝感情）を有しているだけで道徳的判断は勝手に正当化される。これはその反応傾性が歴史的事実の結果として成立したものであっても変わらない。道徳的正当化は「安価」なのである。
- ⇒ Critic：確かに(G2)は誤りかもしれない。だが、「安価」な正当化など放棄されるべきではないか。（cf. 青春時代に聴いていたという理由で今も好きな音楽） ⇒ (G3) へ

3 批判としての系譜学

- (G3) もしある道徳的価値に対する信念が歴史的出来事の結果として生じたならば、その信念は放棄されるべきである。
 - ・ Prinz : ある価値が歴史的産物であることに気づいたからといって、かならずしもその価値を変化させる必要はない。どんな経緯からであれある音楽を好きになったのなら、その音楽を聴き続ける理由としてはそれで十分である。
 - ⇒ Critic : われわれは自らの価値が歴史的なものであると認めてはいない。起源の探求はこれが誤りであることを明らかにする。
 - ⇒ Prinz : 自分のジャズ好きが、ジャズそのものの内在的性質によってではなく歴史的経緯によるものだ気づいたとしても、ジャズ好きを放棄する理由にはならない。道徳の場合も同様。
 - ⇒ Critic : 「卑しい」起源と「卑しからぬ」起源とを区別すればどうか？ ⇒ (G4) へ

3 批判としての系譜学

- (G4) もしある道徳的価値に対する信念が卑しい歴史的出来事の結果として生じたならば、その信念は放棄されるべきである。
 - ・ 「卑しい」は評価語である。ニーチェは自らを超越論的な立場に置いて、そこから起源の「卑しさ」を判断していた。だが、「卑しい」という判断が歴史の産物だとすれば、(G4)は自己論駁的なものとなる。
- ⇒Critic：(G4)はある道徳的行為者が抱えている偽善を診断するためのもの。「卑しい」という判断は行為者自身の道徳体系から下されたものである。ある道徳体系がそれ自体によって非難されるべき出自をもつとすれば、その道徳体系は自らの足場を掘り崩すことになる。
- ⇒Apologist：目的は手段を正当化する。出自が卑しくとも立派な行いをするならばそれでよいではないか。(G4)は発生的誤謬の一例にすぎない。

3 批判としての系譜学

- ⇒ Nietzsche：キリスト教道徳の擁護者はいまだルサンチマンを隠された動機として行為している。だとすれば擁護者は偽善を犯していることになる。そして、偽善はキリスト教道徳自体によって悪とされている。とすれば、擁護者は自身が依拠している道徳を変革すべきである。(G4)は投げ捨てられるべき梯子である。
- ⇒ Prinz：すでに明らかにしたように、キリスト教道徳の擁護者たちはルサンチマンではなく単なる嫌悪によって動機づけられている。嫌悪による動機づけは、ルサンチマンによる動機づけとは異なり、その歴史性があらわにされたからといって擁護者が当惑を覚えるべきものではない。
- ⇒ Prinz：単婚制のように、その価値が他者の利益にはなっても自身の利益にならないものである場合には、その価値を（破棄するのではなく）保持し続けるべきか否かを再考する動機づけが与えられる。
- ⇒ (G5)へ

3 批判としての系譜学

- (G5) もしある道徳的価値に対する信念が卑しい歴史的出来事の結果として生じたならば、われわれはその信念を放棄するかどうかを検討すべきである。
 - ・ Prinz : ここで「卑しい歴史的出来事」として考えているのは、行為者に対する明白な利益があるがゆえにその価値が受け入れられたのではないような事例である。そうした事例においては、現在その価値がわれわれに対して何らかの利益をもたらしているかどうかを問うことが正当化されうる。その価値が有害無益な場合には、道徳を改訂することが望ましい。
- ⇒ここでは、関連する感情の所有に基づいた「証拠」的な意味での保証ではなく、価値の有益性評価に基づいた「道具」的な意味での保証が念頭に置かれている。

3 批判としての系譜学

- カニバリズム再考

- ・ カニバリズムを復活させることは、たとえ自然死した遺体を食する場合でも、滑り坂に陥る危険性を孕んでいる。
- ・ カニバリズムに対する批判は「文明化された」われわれのアイデンティティの一部となっている。

⇒カニバリズムはタブーのままにしておく方が良い。

- 単婚制再考

- ・ 特に単婚制を放棄すべき理由はない。
- ・ だが、複数婚を法的に禁止する理由もない。それは同性愛に基づく結婚と同様、望む者には許可されるべきである。いところ婚も同様。むしろ、いところ婚は親密な関係を築きやすいため望ましいとも言える。

3 批判としての系譜学

- 中絶について
 - ・ スミスさんは教会の教義であるがゆえに中絶に反対している。
 - ⇒ スミスさんが、中絶の禁止は女性の参政権運動を妨害する道具として導入されたと信じるに至ったと仮定する。
 - ⇒ スミスさんは即座に価値を改訂すべきとは言えない。だが、この系譜学的分析によってスミスさんが保持している中絶反対の理由が疑義に晒されたならば、その価値を改訂すべきか否かを再考すべき。
-
- 系譜学的思考の有用性
 - ・ われわれは通常、自身の価値観を熟考した上で受け入れているわけではない。系譜学的思考はそうした価値観を批判的に再考するためにしばしば有効である。

End
